

# 国 語

## 第 2 回 (10月)

テスト 時 間	50 分
------------	------

平均点 (都標準)	56 点
--------------	------

問題番号	正答率	問題番号	正答率	問題番号	正答率			
1	(1)	93.9	3	[問 1]	88.7	5	[問 1]	16.2
	(2)	96.9		[問 2]	62.5		[問 2]	46.2
	(3)	66.0		[問 3]	70.2		[問 3]	36.3
	(4)	74.1		[問 4]	79.8		[問 4]	52.4
	(5)	89.8		[問 5]	21.8		[問 5]	53.2
2	(1)	77.7	4	[問 1]	50.4			
	(2)	57.1		[問 2]	51.6			
	(3)	70.4		[問 3]	48.4			
	(4)	84.6		[問 4]	36.8			
	(5)	64.6		[問 5]	3.0点			

注：4[問 5] の作文の問題の正答率のらんの数値は、この問題の平均点を示しています。

## 1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 各界の著名な人々が集まる。
- (2) 穏やかな海を船が進んでいく。
- (3) 両国は貿易に関する協定を締結した。
- (4) 隣国との関係に暗雲が垂れ込めている。
- (5) 実力を発揮できず悔いの残る結果に終わる。

## 2

次の各文の——を付けたかたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) スジの通った話だと納得する。
- (2) 全社員に制服をシキユウする。
- (3) 費用の不足分を各自でフタンする。
- (4) 平安時代のキゾクの生活を調べる。
- (5) ソナえ付けの家具に衣類を収納する。

## 3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

明治二十九年。同じ村出身の落（十三歳）と健吉（十五歳）は、近くの温泉町に奉公に行った。落は町長の家の下働き、健吉は酒屋の小僧として働いていたが、ある日、健吉が落を呼び出し、頼みことをもちかける。

「なあ、頼む」

健吉どんの坊主頭が落の目の前にあった。

「頭なんか下げないで。だってそんなことできないもの」

腹が立った。<sup>(1)</sup>無性に腹が立った。落は、下駄の先で井戸の石積みを軽くけった。忙しい中、せっかく台所を出てきたのに、もうちょっと楽しいなにかみであってほしかった。

「なにも物取りに入ろうってわけじゃない。話を聞いただけだ」

「それでも、わたしに手引きをしるって言うんでしょう。やっぱりぬすつとみたいじゃないの」

「じゃあ、案内してくれなくてもいい。家の間取りだけ教えてくれればいい。おれが勝手に入るから。おまえには迷惑かけない。正義のためだ。な、頼む」

ここは、湯之町だ。近くから、遠くから、温泉に入りに来る客でもっている。

町のまんなかに、千年以上前から湧く源泉がある。湯量はあるが湯元はひとつだけで、旅館に内湯はない。湯元の公衆の温泉に泊まり客は行って入るのだが、建物も湯船も古くて汚い。

——百年後を頭において、できるかぎり立派な町立温泉を建てるべき

だ。

というのが、この家の主、道也様<sup>\*</sup>の意見だ。それで町は公衆温泉の建て替えに動いている。

だが、反対派もいるのだ。

健吉どんはなぜか反対派に入ったらしい。それで、今晚の会議のなかみを知りたいから、こっそりこの家の中に入れてくれというのだ。

<sup>(2)</sup>「どっちが正しいかなんて、わたしのようなもんにはわからないし」

落<sup>3)</sup>がそう言うのと、健吉どんは落の両腕を外からぎゅっつつかんだ。

どきりとする。男の人にそんなことをされたのははじめてだ。近づいてきた体から放たれる汗のすっぱいにおいが、ふしぎに好ましい。

「建て替えるということは、湯釜を替えるということだぞ。わかっているのか」

健吉どんは、落の両腕をゆすって、さも重大なことのようについた。

湯釜というのは、湯の吹きだすところにすえられた大きな石のことだ。

大人四人が手をつないだぐらいの太さの円筒で、てっぺんから湯があふれ落ちるようになってる。

「湯釜を替えると、湯が出なくなってしまうんだぞ」

「え、ほんとう?」

「そうだ、神罰<sup>4)</sup>がくだる」

昔、むかしのおおむかし、何百年も前のこと、このあたりで合戦があった。そのとき、侍たちがこともあろうに、血のついた刀を、温泉で洗ったのだ。

神は怒り、湯が止まった。町の者が湯あみをするができなくなった

ばかりでなく、湯之町へ来る人もとだえた。湯治客<sup>\*</sup>あての宿屋、商人、

花街の女たちさえ困りはてた。何日も、何か月も湯は出ない。ついに時の

領主が、山の神社で祈禱<sup>きとう</sup>をさせた。一月の寒い中、町の若い衆は浜に行っ

ては着物のまま海に入り、山頂にかけのぼっては祈った。ご祈禱は二十一

日続いた。それが終わった次の朝のこと、湯が高くふきあげたのだった。

「今の湯釜は、そのとき作られた由緒<sup>ゆいしょ</sup>ある湯釜だ。替えればまた湯が出なくなる」

「だって、わたし、湯之町の者じゃない……」

どうだっていいとは決して思わないが、健吉どんだって落と同じく村の子なのに、湯之町に肩入れするのが気に入くわない。

「おまえ、わかってないな」

<sup>(3)</sup>健吉どんは、落から手を離し、腕を組んで偉そうな顔をした。

「湯之町がさびれるってことは、おれたちが村へ帰されるってことだぞ。

仕事がなくなるんだ」

なくなったってかまわないと落は思った。もともと嫁に行くまでの行儀

見習いでこの家に奉公に出された。落の家は地主さんのたんぼを借りて米

を作っている。せいたくはできないが、借金があるわけでもない。帰って

も両親はまあ、食べさせてはくれるだろう。

しかし、と考えるもする。もどれば、すぐに結婚させられるにちがいない。

相手は、お寺の奥さんが適当に決める。いとこはとなりの村の会ったことのない人のところに嫁に行った。山持ちだ、食うに困らぬと言われて行っ

たが、とんでもない酒飲みで、飲んでは殴るんだって、はじめての里帰り

で泣いてたっけ。

「おれは、<sup>\*</sup>丁稚<sup>\*</sup>から番頭<sup>\*</sup>になって、のれん分けしてもらって、湯之町で酒屋を出すんだ。村に帰されちゃあ、それができない」

<sup>(4)</sup>どきりとする。目が、きらきら光っている。奥様の帯どめの黒水晶のようだ。

会合のたびに健吉どんが酒樽<sup>さかだる</sup>をかついでやってくるのがうれしかった。ちよつとのすきに、立ち話で田舎のうわさなど聞いた。

(わたし、健吉どんが好きなのかも)

酒樽をひよいかかえあげられるたくましい体つきだけではない。この目がいい。

「落、落や。なにしているの。早く小皿を並べてちょうだい」

奥様の声が台所から聞こえる。ちよつと水を汲<sup>く</sup>んできますと言って出てきたが、時間がかかりすぎたのだ。

「わかった。勝手口を開けてあげる。日が暮れたら外で待ってて」

<sup>(5)</sup>落はそう健吉どんにささやいてかけた。

これは悪いことだ。

とつても悪いことだ。奉公先の主人の信用を裏切るなんて。

(でも、物を取るってわけじゃないし。聞くだけだから)

落は自分にそっくりいさせた。

(森川成美「うたう湯釜」による)

〔注〕 手引き——道や場所を知らない人を案内すること。

内湯——旅館の中にある温泉浴場のこと。

道也様——落が奉公している家の主人。町長を務めている。

湯治客——病氣治療などの目的で温泉を利用する客。

花街——遊女や芸者の集まっている場所・ところ。

丁稚<sup>でっぢ</sup>——職人・商人の家などに一定年限の間住み込みで働く少年。雑用や使い走りをする。

番頭——商家の使用人のかしらで、主人に代わり店を取りしきる者。

のれん分け——新しく店を出させ、同じ屋号を名乗ることを許すこと。

〔問1〕<sup>(1)</sup>無性に腹が立った。とあるが、そのわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 家の中に入る手引きをするというとんでもないことを、健吉がまるで楽しい頼みごとでもあるかのように言ったから。

イ 同じ村の出身であるのいいことにして、主人を裏切らねばならないような悪いことを健吉が押しつけてきたから。

ウ どんな話なのかと期待して仕事をぬけ出してきたのに、健吉の話はぬすつとの手引きのような頼みだったから。

エ 二人にとって楽しくなるようなことでなく、健吉ひとりの満足のため

に落を利用しようとたくらんでいるから。

〔問2〕<sup>(2)</sup>「どっちが正しいかなんて、わたしのようなものにはわからないし」落がそう言うと、健吉どんは落の両腕を外からぎゅつとつかんだ。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 健吉に反感を抱いている落と、それに全く気づいていない健吉の様子

を、言葉と動作という別の表現をすることで印象的に表現している。

イ 落の戸惑いと、重要な頼みごとをしていると意識する健吉の強い思いとの隔たりを、二人の言動の違いを通して対照的に表現している。

ウ 落の発言が間違っていることを、即座に正してやろうとする健吉の様子を、力強い行動の描写によって具体的に表現している。

エ 冷たい態度をとる落に、親しみを示して納得させようとする健吉の様子を、なれなれしい行為によって象徴的に表現している。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 健吉どんは、落から手を離し、腕を組んで偉そうな顔をした。

とあるが、この表現から読み取れる健吉の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 事情がよくわかってない落も、湯之町で働いていることは自分と同じなので、年上の立場から見守っている様子。

イ 頼みごとの正しさを示すために、町立温泉の建て替えに関わっている自分と落の立場の違いを見せつけている様子。

ウ 湯之町で働いていながら湯釜の大切さを知らない落に対し、自分の明解な考えに自信をもち、誇っている様子。

エ 自分の頼みに反抗的な落を言う通りにさせようとして、実際は湯釜のことを知らないのに、虚勢を張っている様子。

〔問4〕<sup>(4)</sup> どきりとする。とあるが、このときの落の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 酒樽をかかえあげるたくましさだけでなく、自分の夢を見据えて一直線に進もうとしている健吉どんの目つきにひかれている。

イ 湯之町で酒屋を出すという強い意志が表れている目つきを見て、自分

とは違う世界で生きている健吉どんに圧倒されている。

ウ 年下の自分に対して、湯之町で酒屋を出すという夢を真剣に語っている目から、自分に好意をもってくれていると感じている。

エ 会合のたびに健吉どんが酒樽をかついで一生懸命働いているのは、酒屋を出すという目的があるからだを知って驚いている。

〔問5〕<sup>(5)</sup> 落はそう健吉どんにささやいてかけた。とあるが、落がこの

ときの気持ちを健吉に伝えるとしたら、どのように言うと考えられるか。落の気持ちを読み取り、話す言葉を**四十字以上五十字以内**でまとめて書け。なお、や・なども、それぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（\*印の付いている言葉には、本文のあとに「注」がある。）

見る人によって物の価値が大きく変化するということは、世の中全体が、相対的な価値基準によって構成される社会になる、ということだ。<sup>①</sup>さらに、物の価値は人間と物という関係で語られるだけでなく、物と物との関係もまた、重要な意味を持つてくる。（第一段）

画家マチス\*は「私は物そのものを描こうとしているのではなく、物と物との関係を描くのだ」と語った。マチスは、とくに色彩において、それ自体の色彩よりもむしろ、それを何か別の色をした物との対比の中においた場合、より美しく輝き始めることを知っていた。（第二段）

マチスのような画家なら、単に、カンバスという四角い枠の中だけで、物の構成を考えれば、それで済む。それに較べ、私たちが一般に暮らす生活領域を考えた場合、ひとつくちに物と物の関係といっても、それこそ無限の組み合わせがある。ひとつの美しいものが、必ずしも、その隣のパートナーとの美しさを保証しない。往々にして、突出した美しさは全体の中で浮きあがってしまう。（第三段）

二十世紀の画家マチスに指摘されるまでもなく、人々は美しさが、多くのものの調和の中から生まれることを知っていた。とりたてて目を見張る技術革新のなかった時代、素材と素材、物と物との組み合わせにより美しさをつくりあげることこそ、最も重要なことだった。そのような時代には進歩は美しさと無縁で、美しさは調和と構成の中から生まれた。（第四段）

今日、進歩、革新は私たちの日常だ。好むと好まざるにかかわらず、それを避けて暮らすことはできない。しかし、最近、美しさを進めてきたの

もそれらだが、美しさをしりぞけてきたのもそれである、ということもはつきりしてきた。美しい行進の中で、独り歩調の速い者が隊列を乱すように、前に速く進むことだけが、よしと言えないこともある。（第五段）

そのような目で私たちがとりかまれている空間をもう一度見直してみるといい。私たちは画家がするように、私たちなりに、ふだんから調和をはかり構成を考えている。たとえば外出に際して自分の上着とネクタイとズボンの色の組み合わせについて、まったく考えないという人も今時、珍しいだろう。女性の場合であればなおさらだ。さらに、家の中に目を転じ、家具と床材、壁紙とその近くの調度品、書斎の全体的雰囲気、そして居間は、このような事柄について、私たちは怠りなく注意を払っている。新しい家電製品を購入することが、家庭での日々の生活をより便利にしてくれることも十分承知している一方で、このようなインテリア構成に気を配ることが潤いある生活をもたらしてくれることも知っている。（第六段）

このことは、ひとつには、服装や家具インテリアの範囲であれば、自身の価値観でもって、しかも自分自身の裁量によって構成をはかることが可能だ、ということにもよる。靴とネクタイの色合いが不釣合なら、箆<sup>す</sup>から気に入った柄のものを引っぱり出し、結べばいい。（第七段）

<sup>②</sup>しかし、これがいったん私たちの個人的な裁量の範囲を超えると、はなはだうまくいかなくなる。ひとりびとりには美しさを求める心があるけれど、それを達成する以前に、もっと大きい利害の対立が待ち構えているからだ。おしなべた美しさの喜びよりも、個人的な損得の感情が優先する。ネクタイの柄を取り替えるように、気やすく隣人の意見に従って、自分の家の垣根を取り壊すことはしないのだ。（第八段）

この場合、多くの人が執る行動は、対立でも、融和でも、静観でもなく、

無関心の装いだ。誰もが町全体や、都市全体や、国全体の美しい構成について興味がない装いをする。そしてこの無関心は次第次第に無感動につながる。ふりでしていたことが実際になるのだ。(第九段)

とはいえ、私たちの個人的な美の追求は止むことがないから、ひとりびとりは勝手に、気ままに、自分の裁量の範囲の中で飾ることに努め続ける。また、はなはだしい人は、自らの美の追求の過程で出てきた汚れを、社会に放り出す。こうして、部分的に美しいところと、その逆のところと、凹凸の激しい空間になったのが今のわが国だ。(第十段)

しかも、凹凸など気にすることはなく、全体の水準をカサ上げすることにこそ意味があるのだ、という意見が、産業の社会では大きな説得力をもってきた。カサ上げとは進歩のことだ。周囲に気を配ることなく、個々のものが進歩をとげたのである。全体のバランスに気が使われたとしても、それは美的観点からではなく、機能の不都合にならないように、そうされたいにすぎない。(第十一段)

私たちの意見は機能面においてまとまりやすい。夏は涼しいところを好むし、冬はその逆だ。クルマは走行性に優れて、故障が少なく、しかも安ければ、という点で意見は一致するけれど、色や形状となると人々の意見は途端にまちまちになる。(第十二段)

こうして人々は、ものの価値が、他との関係の中においてこそ真に発揮されることから目をそらし、そのもの自体の発展に力を注ぐようになった。<sup>(3)</sup> 言い換えれば、ひとつひとつの新しいものの光が、全体の醜さを覆ってきたのだ。(第十三段)

バランスへの配慮は個々の発展にブレーキをかけがちだ。このことが当

たっているかどうか疑問だが、少なくとも長い間そう信じられてきた。デザインの世界において、機能美こそ、美しさの窮極であると信奉された時代があったが、自由な発展こそ窮極の美しさを生む、という神話もまた、長く、そして今でも人々の心を捉えている。(第十四段)

物理的、そして精神的自由こそ、文化の発展に欠くことのできないものだ。けれど自由の勢いに任せれば万事うまくいく、という誤解は、経済の世界に限らず、文化の世界にもあてはまることだ。ただ、経済の世界においてよりも、もっと美の世界においての方が自由を認められているのは、経済の世界に較べて、美の世界では調和をはかるための基準がないからでもある。ある基準にもとづいて美しさを求めることは、そうでないとする価値観の者を圧迫する。さらに言うと、美など要らない、と言う者さえあるのだ。美とはかかわりあいなく、美における自由が奨励された理由でもある。(第十五段)

けれど私たちは、あることを達成するためには、何らかの犠牲も必要なことを経験によって知っている。欲しいものを手に入れるには我慢する努力も時には欠かせない。このような努力を文化の世界にも生かすことができないうものだろうか。わずかの犠牲を恐れて、都市や町を荒廃に任すことをこれ以上見過ごしておいてよいものだろうか。(中略)(第十六段)

個人個人が気ままにしてさえすれば、すべての文化を美しく達成できるという、夢のような考えが世の中に蔓延<sup>まんえん</sup>している。自由と自由のぶつかり合いは美しい結晶を創りあげることもあるけれど、空しく荒廃<sup>むな</sup>につながることも忘れてはならない。(中略)(第十七段)

\* フィレンツェの町が美しいのは、商人の自由な活動の精神と、同時に、

彼らがフィレンツェの市民のひとりであるという、自己規制の厳しいしのごいの中から生まれた。フィレンツェ・ルネサンスの人、レオナルド・ブルーニの言葉、「人間が人間であるためにもっとも重要な条件とは、市民であるということだ。そして、その市民とは、「公」<sup>おおよそ</sup>のことを考える人ということだ」——この言葉を今一度、私たちは噛みしめることが必要だろう。(第十八段)

(佐藤典司『文化の時代』を生きるために)による)

〔注〕 マチス——アンリ・マチス。一八六九〜一九五四。二十世紀を代表するフランスの画家。

機能美——建築や工業製品などで、余分な装飾をせず、むだのない形や構造を追求した結果、自然に表れる美しさ。

フィレンツェ——イタリア中部の都市。十五世紀にルネサンスの文化的な中心となった。

レオナルド・ブルーニ——一三七〇〜一四四四。イタリアの市民ヒューマニズムの代表的な思想家の一人。

〔問1〕<sup>(1)</sup> さらに、物の価値は人間と物という関係で語られるだけでなく、

物と物との関係もまた、重要な意味を持つてくる。とあるが、筆者が「物と物との関係もまた、重要な意味を持つてくる」と述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア ひとつの美しいものそれだけよりも、物と物との組み合わせによる調和と構成が美しさをつくりあげるものだ、と考えたから。

イ 進歩、革新が私たちの日常になっていて、それが物の美しさをおし進めてきているので、一つの物の突出はそれを害する、と考えたから。

ウ 画家ならばキャンバスの中で物の構成を考えていけば美しさを追求できるが、一般的な生活領域では物と物の関係が多様である、と考えたから。

エ 世の中全体が、相対的な価値基準によって構成されているので、ひとつひとつの物の美しさが、他の物との比較で決まる、と考えたから。

〔問2〕<sup>(2)</sup> しかし、これがいったん私たちの個人的な裁量の範囲を超えると、

はなはだうまうまかなくなる。とあるが、筆者がこのように述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 美しさについての個人の価値観が均等化したため、とりあえず全体の進歩に意味があるとする意見の方が説得力がある、と考えたから。

イ 自分自身の価値観で好きなように美しさを構成できないために、価値観の対立が起きて美しさを生み出せなくなる、と考えたから。

ウ 誰もが町全体や、都市全体や国全体の美しい構成について興味をもてないために、個人が美しさを求めなくなる、と考えたから。

エ 全体の構成の美しさに注意を払うよりも、個人個人がそれぞれに自分にとつての美しさを追求するようになる、と考えたから。

〔問3〕<sup>(3)</sup> 言い換えれば、ひとつひとつの新しいものの光が、全体の醜さを覆ってきたのだ。とあるが、「ひとつひとつの新しいものの光が、

全体の醜さを覆ってきた」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 物と物との関係から生まれる美は失われつつある中で、個々のものの進歩によって現実の醜さから目をそらしてきたということ。

イ デザインの世界の機能美のように、機能の不都合にならないことだけが考えられ、物そのものの美しさが損なわれたということ。

ウ 物と物とのバランスへの配慮がされたということによって、個々のものの美しさが考慮されなくなってきたということ。

エ 個人的な美の追求は止むことがないので、美しいところによって、醜いところを隠す技術が確立してきたということ。

〔問4〕 この文章の構成における第十五段の役割を説明したものと最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア それまでに述べた、自由な発展と全体の調和との関係を整理するとともに、新たな事例を付け加えて、論の方向性を明確にしている。

イ それまでに述べた、わが国の個々の自由な発展に対し、自由についての考え方を明らかにして、自説の主張へとつなげている。

ウ それまでに述べた、物と物の関係が作り出す問題点を受け、それを解決する具体的な考え方を提示することで結論に導いている。

エ それまでに述べた、全体の調和への無関心な態度に対して、それとは対照的な調和を推進する考え方を挙げ、その違いを明らかにしている。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、「調和の美しさ」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や・や「なども、それぞれ字数に数えよ。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。なお、あとの□内の

aは、本文中の□で囲んだAの「伊勢物語」の現代語訳である。

(\*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

本歌取りは昔の歌をふまえて新しい歌を詠むことです。万葉時代にすでにありましたが本格的になったのは平安時代の終わり頃からで、なかでも藤原俊成(一一一四〜一二〇四)は明確な美意識をもって本歌取りに励みました。

俊成の歌をあげましょう。

夕されば野べの秋風身にしみて鶉うづなくなり深草ふかぐさの里 藤原俊成

(千載集・秋上)

訳▼夕方になると、野辺を吹く秋風が冷たく身にしみて、鶉が悲しい

声で鳴く。その声が遠くから聞こえてくる深草の里よ。

この歌は、次の「伊勢物語」一二三段をふまえて詠まれています。

A むかし、男ありけり。深草に住みける女を、やうやうあきがたにや思ひけむ、かかる歌を詠みけり。

年を経て住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

女、返し、

野とならば鶉となりてなきをらむ狩にだにやは君は来ざらむ

と詠めりけるにめでて、ゆかむと思ふ心なくなりけり。

つきあっているうちに少しずつ飽きてきた男、それを察知した女とのや

りとりが語られています。女は「深草」に住んでいた。京都市の南、伏見稲荷大社のあたりです。都から遠くて通うのに不便だし、田舎住みの女だ

から都会的な魅力が足りなかったのかもしれない。「もしも私を通わなくなったら、おまえの家が見えなくなるほど草が生い茂り、通う道もわから

なくなつて、ほんとに深草の里になってしまうのだろうね」。この歌を受

け取った女は「そうなたら私は深草の下陰で鶉になって鳴いております

わ。もしもあなたが狩りに来て、鶉の声を聞きつけ、思い出して立ち寄つ

てくださるかもしれないから」と歌を返します。

「狩り」に「仮り」(もしも)を掛けています。男はこの歌を読んで、も

とのように女の家に通いました。<sup>1)</sup>女は、男が来なくなるのを予感していた

のでしよう。男をなじつてもよかつたけれども、素直に受け止めてそう詠

み返した。男にはそれがいじらしく思われて、また通い出した。ほかの解

釈もできるでしょうが、一応、そんなふうに考えられると思います。

俊成の歌とくらべてみましょう。何が同じで、何が違いますか。下句しもく

の「鶉なくなり深草の里」という場面が同じですね。しかし、上句かみく

「夕されば野べの秋風身にしみて」は「野」は同じだけれども、「夕され

ば」(夕方になると)という一日の時間、「秋風」という季節、「身にしみ

て」という痛切な身体感覚が新しく加わっている。これらは一二三段に書

かれていません。

俊成は、場面はそのままにして、時間・季節を加え、冷たい秋風が「身

にしみ(る)」という体感を加えた。こうして新しい歌ができあがったの

ですが、もっと分析を進めてみましょう。

「秋風」は男が女に飽きたことをあらわします。「秋」は「飽き」の掛詞ことばです。男の心は深草をかき分けて吹いてくる秋風のように冷たく変わったというのです。それなら「秋風身にしみて」はだれの「身にしみ」のでしょうか。作者の俊成でしょうか。男に捨てられる一二三段の女、それとも鶉でしょうか。捨てられた女が鶉になって待つというのですから、女ではなく鶉とみるべきです。

しかし私たちは一二三段を知っており、それと比較して俊成の歌を鑑賞します。<sup>(2)</sup>「秋風」が身にしみてきます。なかには、俊成自身が一二三段をそう読み取って詠んだのだろうと思う人もいるでしょう。この歌は、読者側のさまざまな想像を許容する意味の深い歌になっています。

<sup>(3)</sup>それと関連して、もう一つ注意すべきことがあります。一二三段は二人の愛の回復を語って閉じられますが、俊成の歌ではどうでしょう。「夕」は男が愛する女のもとにやってくる時間です。なのに冷たい秋風が吹き荒すさんでい。俊成が新しく設定したこの場面は、二人の愛はひとたびよみがえり、やっぱり破局に終わったと物語っているようにみえます。

俊成は一二三段のあとに続く、さらに悲しい愛の結末を構想したのではないのでしょうか。わずか三十一文字の和歌の中に、物語のその後を想像させる前衛的な試みをしたように思われます。和歌は小さくて短いという印象を打ち砕く大きなドラマを感じさせます。(中略)

ちなみに、「伊勢物語」のような物語の場面をふまえて歌を詠むことを一般に本説取りといいます。これも本歌取りの一種であって、本質的に違うものではありません。

俊成の本歌取りを理論的に発展させ、みずからも優れた実践家であったのが子息の定家よしたけ(一一六二〜一二四二)です。(中略)

本歌取りは、古き良き和歌をしつかりと認識し、その美しさを味わい、それを踏まえて歌を詠み、より深く古歌の力を体得してみようということなのです。そうすると自分の詠んだ歌の中に古き良き歌が息づくこととなる。和歌の伝統はそういう歌人たちによって脈々と受け継がれていく。歌人は和歌の伝統を身を以てもつ生き、それをふまえて新しい歌を作り和歌の伝統を更新する。こうして和歌は永遠に続いていくわけです。

さて、定家はどんな本歌取りをしたのでしょうか。

駒とめて袖うちらはらふ陰もなし佐野のわたりの雪の夕暮ゆふぐれ 藤原定家

(新古今集・冬)

訳▼馬を停めて、袖に積もる雪を払おうにも、立ち寄る物陰すらない。

佐野の渡しの雪の夕暮よ。

「新古今和歌集」冬歌に入っている歌です。本歌は「万葉集」巻三、長忌寸ながの奥麿おくまろの、

B 苦しくも降り来る雨か三輪みづらの崎佐野の渡りに家もあらなくに

苦毛 零来雨可 神之崎 狭野乃渡尔 家裳不有国

という歌です。巻九に「大宝元年辛丑かのとうしの冬の十月に、太上天皇おほきすめらみこと・大行天皇さきの、紀伊の国に幸いです時の歌十三首」と題する歌群があり、その中

奥麿の歌が一首あるので「神之埼 狭野乃渡」は和歌山県新宮市三輪崎および佐野のことで、奥麿はここに来て詠んだのではないかと考えられています。「旅の途中、雨が激しく降ってきて、つらいことよ。この渡し場にはくつろげる我が家もないのに」という意味です。急に降ってきて、びしょ濡れになったのでしょうか。生の感情をうたった体験の歌とみてよいでしょう。

定家の歌をみると「佐野の渡り」は本歌と同じですが、「雨」は「雪」に、季節は「冬」になっています。さらに注意すべきは、「(4)」という感情表現がなく、馬に乗って旅する人の姿が一枚の絵のように浮かんでくる作り方をしていることです。衣服に積もる雪を払って休む物陰もなく、辺りは暗くなり舟もなくて川を越えられない。

読者の目の前にこんな風景が見えますが、この風景はいつまでもあるわけではない。「夕暮」なのでまもなく見えなくなり、雪の原は微かな夜の光を吸ってうつつすらと広がるだろう。視覚が利かなくなると、そういう風景が脳裏に浮かんできます。「万葉集」とまるで異なった凄絶な美の世界、美しいけれど寒々として妖しさもただよいます。

現実体験の歌、感情の歌からの超脱。それは本歌の否定ではありません。定家の歌の底に「万葉集」の歌が重く低く響いている。それを感じるとき、定家の巧みさがよくわかる。重層的で立体的な詩の空間が創造されているのです。

〔注〕 伊勢物語——平安時代中期の歌物語。作者不詳。

藤原俊成——平安時代後期〜鎌倉時代初期の歌人。

前衛的——その時代に先がけているさま。

定家——藤原定家。鎌倉時代初期の歌人。

a 昔、男がいた。深草に住んでいた女を、しだいに飽きかげんに思うようになったのであろうか、こんな歌を詠んだ。

年を経て住みこし里を出でていなばいとど深草野とやなりなむ

〔訳〕長年暮らしてきたこの深草の里を私が出て行つて通わなくなったら、今でさえその名のとおり草深いのだから、ますます草深い野となつてしまふのでしょうか。

女が、それに返して、

野とならば鶉となりてなきをらむ狩にだにやは君は来ざらむ

〔訳〕ここがあなたのおっしゃるように草深い野となりました、私はその野に鶉となって鳴いて——泣いておりましょう。せめて狩にだけなりと、たとえそれがかりそめのことでも、あなたがおいで下さないことがありましようか。

と詠んだのに感心して、男は出て行こうと思う心がなくなつてしまったのだった。

〔問1〕 女は、男が来なくなるのを予感していたのでしよう。とあるが、

女が予感する直接の根拠となる言葉を、                    で囲んだAの男の歌の中から六字でそのまま抜き出して書け。

〔問2〕 <sup>(2)</sup> そういう読者には鶉の姿が胸に痛く感じられ、鶉と同じように

「秋風」が身にしみてきます。とあるが、「鶉の姿が胸に痛く感じられ、鶉と同じように『秋風』が身にしみてきます」の説明として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 秋風が身にしみて鳴く鶉の姿に、男に捨てられた女の悲しみを重ねる作者の思いを共有すること。

イ 草深い田舎で、夕方に吹く冷たい秋風を身に受けて寂しく鳴いている鶉の姿を哀れに思っていること。

ウ 男に飽きられて秋風が身にしみる女の気持ちを鶉に投影し、その鶉の姿に深く共感していること。

エ 夕方の秋風に鳴く鶉に自分をたとえた女をいじらしく思う男の気持ちを、身にしみて感じること。

〔問3〕 <sup>(3)</sup> それと関連して、もう一つ注意すべきことがあります。とあるが、

俊成が本歌取りによって意図したと思われる、この歌のもう一つの特色を述べた次の文の                    に入る適切な言葉を、現代語で書かれた文章中から十五字でそのまま抜き出して書け。

この歌が伊勢物語の一二三段で語られた、男と女の物語の                    になっているということ。

〔問4〕 (4) に入る最も適切な言葉を、Bの歌から四字でそのまま抜

き出して書け。

〔問5〕 <sup>(5)</sup> 川を越えられない。とあるが、これと同じ意味・用法で「られ」が用いられているものを、次の各文の――をつけた「られ」のうちから選べ。

ア 先生は五時ごろ出かけられました。

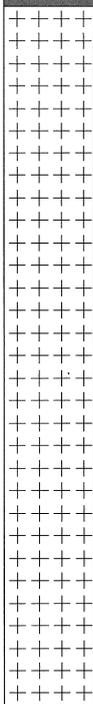
イ せまい部屋からやっと出られた。

ウ 不法に捨てられたゴミを処理する。

エ 祖母の病状が案じられてならない。

## 《国 語》

偏差値	第1回 (9月)	第2回 (10月)	第3回 (11月)	第4回 (12月)	第5回 (1月)
76	96	95		97	96
75	94	94		96	94
74	92	93	100	94	93
73	91	92	98	93	92
72	89	91	97	92	90
71	87	90	96	91	89
70	85	88	95	89	88
69	84	87	93	88	87
68	82	85	92	87	86
67	80	84	90	86	85
66	78	82	88	84	84
65	77	80	86	82	82
64	75	79	85	81	80
63	73	77	83	79	79
62	72	75	81	77	77
61	70	74	79	76	76
60	68	72	77	74	74
59	66	70	76	72	72
58	65	69	74	71	71
57	63	67	72	69	69
56	61	66	70	68	67
55	59	64	69	66	66
54	58	62	67	64	64
53	56	61	65	63	63
52	54	59	63	61	61
51	52	57	61	59	59
50	51	56	60	58	58
49	49	54	58	56	56
48	47	52	56	54	54
47	45	51	54	53	53
46	44	49	52	51	51
45	42	47	51	49	50
44	40	46	49	48	48
43	38	44	47	46	46
42	37	43	45	45	45
41	35	41	44	43	43
40	33	39	42	41	41
39	31	38	40	40	40
38	30	36	38	38	38
37	28	34	36	36	37
36	26	33	35	35	35
35	25	31	33	33	33
34	23	29	31	31	32
33	21	28	29	30	30
32	19	26	28	28	29
31	18	25	26	27	27
30	16	23	24	25	25
29	14	21	22	23	24
28	12	20	20	22	22
27	11	18	19	20	20
26	9	16	17	18	19
25	7	15	15	17	17



〔解答〕

- ①・② 2点×10    ③・④〔問1〕・〔問4〕・⑤ 5点×14    ④〔問5〕 10点
- ① (1) ちよめい    (2) おだ(やか)    (3) ていけつ    (4) あんうん  
(5) く(じ)
- ② (1) 筋    (2) 支給    (3) 負担    (4) 貴族    (5) 備(え)
- ③ 〔問1〕 ウ    〔問2〕 イ    〔問3〕 ウ    〔問4〕 ア    〔問5〕 主人の信用を裏切るようなことをするのは、健吉さんの真剣さというたれで何とかしてあげたいからよ。(例)
- ④ 〔問1〕 ア    〔問2〕 エ    〔問3〕 ア    〔問4〕 イ    〔問5〕 別ページの解答例参照
- ⑤ 〔問1〕 出でていなば    〔問2〕 ウ    〔問3〕 その後を想像させる前衛的な試み    〔問4〕 苦しくも    〔問5〕 イ

〔解説〕

③〔問1〕 一行後に「忙しい中、せっかく台所を出てきたのに、もうちょっと楽しいなみであってほしかった」とある。後半で、蒔が健吉に対して好意を感じていることがわかるが、その点から推しても、この「楽しいなみ」は蒔が健吉の話に何かしらの期待を抱いていたことを表しているといえる。

〔問2〕 表現の特徴を問う問題は、設問部分だけでなく前後の文脈も含めて考えよう。蒔に関しては、前に「そんなことできない」、後に「わたし、湯之町の者じゃない」とあり、公衆温泉の建て替えについては終始消極的である。これに対し健吉は、「正義のためだ」「建て替えるということは、湯釜を替えることだぞ。わかってるのか」と、さも重大なことに言っている。「湯釜を替える」ことへの認識という点で、二人の間に大きな隔たりがあり、それが傍線(2)の言葉や動作に対照的に表れていることを読みとろう。

〔問3〕 直前に「おまえ、わかってないな」とあり、健吉が「湯之町の者じゃない」から関係ないといわんばかりの蒔の考えを浅はかだと思っていることがわかる。湯之町で酒屋を出す夢をもっている健吉にとって、「湯釜を替える」ことに反対するのは筋の通ったことであり、自信を持って主張できることなのである。

〔問4〕 直後に「目が、きらきら光っている」とあり、傍線(4)は、真剣に将来の夢を語っている健吉の目を見たときの蒔の気持ちである。「会合のたびに……うれしかった」、「わたし、健吉さんが好きなのかも」、「……たくましい体つきだけではない。この目がいい」などの表現にこめられている蒔の健吉への思いを前提に考える。

〔問5〕 「これは悪いことだ。……奉公先の主人の信用を裏切るなんて」と思いながらも、(でも、物を取ってわけじゃないし。聞くだけだから)と「自分にそういいかせ」てまで健吉の頼みを受け入れるのは、好意をもっている健吉の、真剣に自分の将来のことを考えている姿にいつそうひかれたからである。その思いを軸にして書いてみよう。同趣旨正解。

【採点基準詳細】

- ・実際に会話としてそのまま口にするのできる部分をはっきり示していること。
- ・文末が「……から(理由を述べる形)」「……と思っている(気持ちの説明)」など、会話文と見なせない表現で終わっているものは×。
- ・合計5点の内容は、次のようにする。

- ①自分の行為についての言い訳・よいことではないという自覚・迷いを表す表現。本意ではないが仕方がないなどの表現が書いてある↓2点。
- ②健吉さんに対する好意の表れが書いてある↓3点。

5点獲得の例

・勝手口を開けるようなことをするのは、健吉さんの夢がかなうようにお手伝いしたいからよ。

・健吉さん本気で話を聞きたいのね。いいことではないけど、私健吉さんのために開けてあげるよ。

・勝手口を開けてあげてくれることを誰にも言っちゃだめよ。私がこんなことをするのは健吉さんのためなのだから。

・しかたがないわ。健吉さんの言うとおりにするわ。それで健吉さんの思いが通るなら開けてあげるわ。(しかたがない)で、①の要素とする。

・奉公先の主人を裏切るの嫌だけど、健吉さんがそこまで言うなら、私もがんばってみるね。(健吉さんがそこまで言うなら)で、②の要素とする。

・会議のぬすみ聞きはよくないけど、物を取るわけじゃないし、健吉さんの夢のためであるから協力しよう。(健吉さんの夢のため)で、②の要素とする。

2点のみの例

・仕方ない。今回だからね。もし見つかったら大変なんだから。慎重に行動しなきゃだめだよ。

・健吉さんは物をとるわけではないから開けてあげるんだよ。誰にも言わないでよ。悪いことなんだから

・誰にも言わないでね。ぬすつとではないけれど、私は奉公先の奥様たちを裏切るようなことをするのだから。

3点のみの例

・男の人に腕をつかまれたのは初めてだけど嫌な気持ちではなかったわ。私健吉さん

のことが好きなのかも（単なる告白だけで①の要素がない。）

・ 勝手口を開けるのは健吉どんが夢を語る姿が私の胸にせまってきたからなのよ。わかってね。

・ 健吉どんのことが好きだから、この頼まれごと、あなたのためだと思って引き受けてあげる。

×の例

・ 物をとるってわけじゃないし、ただ聞くだけなのだから大丈夫でしょう、日が暮れたら外で待っててね。

・ こんな話をしているところを奥様に見つかったら大変だわ。とりあえず用事はわかったから早く行って。

・ 本当はとても悪いことだけど、健吉どんのためなら協力しますから、私に好意を持ってください。「私を好きになって」は全く根拠がなく、動機として言いすぎなので0点。）

・ 私も村にはまだ帰りたくない。だから、悪いことでも協力してあげる。健吉どんの夢を私が応援する。「私も村に帰りたくない」という動機から発生した行動ではないので0点。）

〔問1〕「物と物との関係」については、マチスを取り上げ、「物と物との関係を描く」と、それ自体よりも別の物との対比で美しさを描いた、としている（第二段）。生活領域では絵画と違って、「物と物との関係」には無数の組み合わせがあり、ひとつの美しものが、必ずしも全体の美しさにはならないことを挙げている（第三段）。さらに、「人々は美しさが、多くのものの調和の中から生まれることを知っていた」（第四段）とあるように、調和と構成から美しさが生まれるので、「物と物との関係」も重要なのである。

〔問2〕 直後の「ひとりひとりには美しさを求める心があるけれど……もっと大きい利害の対立が待ち構えているからだ」が一応の理由説明となっている。全体の「おしなべた美しさ」よりも、「個人的な損得の感情が優先」するのである。以下、「全体の」美しい構成について興味がない装い（ふり）↓「無感動」↓「個人的な美の追求は止むことがない」と詳述されている。その結果が、美しさに関して「凹凸の激しい空間になった」ということである。

〔問3〕 傍線(3)は、直前の文の「ものの価値が、他との関係の中においてこそ真に發揮されることから目をそらし、そのもの自体の発展に力を注ぐようになった」の言い換えである。つまり、個々のものの発展の陰で物と物との関係が作り出す価値（全体の美）は失われてきたが、個々のものの発展に力を注ぐことで、全体の醜さに目を向けることなく過こしてきたというのである。

〔問4〕 第十四段までは、全体には無関心に、個々のものの発展に力を注ぐ現代のわが国

の状況について説明し、「自由な発展こそ窮極の美しさを生む」という「神話（根深く信じられている考え）」が存在するということを述べている。第十五段では、自由は文化の発展に必要なが、自由に任せるだけではうまくいかないことは経済でも文化でも同じだとし、美の世界の自由について経済と比較している。第十六段で、我慢する努力を文化の世界にも生かせないかと続け、調和ある文化（美）の達成のためには、自由と自由のぶつかり合いを避け、自己規制の精神も必要だとする筆者の主張を展開するのである。

〔問5〕 別ページの解答例参照。

〔問1〕 Aの原文中の男の歌「年を経て……野とやなりなむ」の現代語訳がaの中にあるので、対照させてみる。男の歌の訳に「私が出て行って通わなくなった」と、深草の里を去ることを暗示する言葉があるのに着目する。歌では「住みこし里を」出でていなば↓「この里を」出ていってしまったら」となっている。

〔問2〕 伊勢物語の二三段を知っている読者には、鶺鴒の姿（男に捨てられ、鶺鴒になって鳴く女）が胸に痛く感じられ、鶺鴒（その女）の身になったように、秋風が身にしみるといっているのである。

〔問3〕 傍線(3)「もう一つ注意すべきこと」として、二三段は二人の愛の回復で終わったのに対して、俊成の歌では、愛がよみがえったあとと破局に終わったように見えるとあり、「二三段のあとに続く、さらに悲しい愛の結末を構想した」のではないかとある。それによって意図したのは、男と女の物語の「その後を想像させる前衛的な試み」である。

〔問4〕 Bの歌で感情表現を表す言葉は、初句の「苦しくも」しかない。それ以外の部分は情景描写となっている。

〔問5〕 傍線(5)の「越えられない」は「越えることができない」と言い換えられ、「それは可能の意味を表す。選択肢ア〜エのうち、イも「出ることができた」と言い換えられるので、可能の意味であることがわかる。アは尊敬、ウは受け身、エは自発の意味である。

第2回(10月)  
作文解答例

今回の作文のポイント

- (1) 問題の文章を読んだ後、「調和の美しさ」というテーマで自分の意見を発表するのにふさわしい「具体的な体験や見聞」を思い出す。
- (2) (1)の「体験・見聞」をどの部分で述べるかを考え、問題文の内容も参考にして自分の「意見」をまとめる。「意見」の中心を一つにしぼって書くよう心がける。

作文採点基準について

- ① 字数：百五十一字以上は減点なし。百五十文字〜百一字は2点減点。百字以下または二百一字以上はさらに減点。

文の冒頭や段落の頭は一字あける。必ず守ること！

「こ」の場合、「や、や」は改行せず、行の末尾に入れる。

- ② 内容：「自分の意見、主張」が書かれているか、「筆者の主張」を踏まえた内容になっているか、「具体的な体験や見聞」があるかどうかを採点項目とする。また、論旨に一貫性があるかどうかについても採点項目とする。なお、本文の抜き出しや要約になっているものは10点減点。
- ③ 文脈・構成・記述・他：文ごとのつながり、一文中の組み立て、語句の使い方、原稿用紙の使い方、文体の統一などの言葉の特徴やきまりの不備を減点項目とする。また、誤字・脱字・送りがない誤り、適切な漢字使用などの表記不備も減点項目とする。

(減点などの採点基準は都立入試の採点基準に沿っています。)

る	感	建	て	都	先	京
よ	じ	物	は	の	日	都
う	ま	を	な	町	の	市
外	す	目	ら	並	修	で
観	。	に	な	み	学	は
を	京	す	い	に	旅	景
工	都	る	も	溶	行	観
夫	の	こ	の	け	で	を
し	例	と	で	込	、	守
て	の	に	す	ん	瓦	る
て	よ	り	。	で	ぶ	た
ほ	う	、	け	い	き	め
し	に	景	れ	る	の	の
い	、	観	ど	の	屋	条
と	そ	の	、	を	根	例
思	れ	調	ど	見	の	を
い	ぞ	和	の	、	セ	制
ま	れ	を	町	感	ブ	定
す	の	壊	に	心	ン	し
。	町	し	行	し	イ	て
	に	て	っ	ま	レ	い
	溶	い	も	し	ブ	ま
	け	る	同	た	ン	す
	込	と	じ	。	が	
	め				古	

〈体験・見聞・意見の中心をしぼる〉

「意見を発表する場合」では、「意見——伝えたいこと」の中心を一つにしぼる。字数も二百字と少ないので、いろいろな意見を述べると、中心点がはっきりしなくなる。右の例では、①と②の京都の条例、実際の町の様子を見たことを体験の中心に据え、後半で、どの町に行っても同じ建物では景観の調和を壊すという意見を述べている。

〈作文の形式を決める〉

今回のように「体験・見聞を示して意見を発表する」という条件の時は、「体験・見聞

↓意見」の形か、「意見↓体験・見聞」の形か、二つのどちらかがよい。(右の例は前者) いずれにせよ、「体験・見聞」と「意見」は分けて述べる方が、内容が伝わりやすい。

〈書き出しを決める〉

「体験・見聞↓意見」の形の場合は、後に「意見」を述べなければならぬので、右の例のように、「体験・見聞の要点①・②」を具体的に、長くなりすぎないように書く。そして、最初に「意見③〜⑤」へと移る。「意見↓体験・見聞」の形の場合は、「意見」の要点をやはり、ズバリ簡潔に書く。



